様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２００４３

研究課題名（和文）東アジア近代における国学の研究

研究課題名（英文）Research of the Guoxue in the East Asia modernization

研究代表者
末岡　宏（Hiroshi, Sueoka）

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：１０２５２４０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,400,000円、（間接経費）　720,000円

研究成果の概要（和文）：日本の国学は従来明治維新以降衰退したと考えられていたが、衰退したのは平田派のみであり、小中村清矩を中心とした考証学派等は明治以降も存続し、東京大学古典講習科となる。
中国の国学は、日本の三宅雪嶺・志賀重昂らの国粋主義に直接の着想を得ている。国粋主義は西洋の学術文化を受容していく過程で日本の伝統文化を再評価したもので、国学に対して批判的であるが、中国において日本の国学は認識されなかった。また国学とは従来の考証学（漢学）そのものであると理解するグループも存在した。
朝鮮の国学は、中国の国学の影響で儒学を国学とするグループがあり、その後日本の国学の影響で朝鮮独自の文化を国学とするグループが登場した。

研究成果の概要（英文）：Although "Kokugaku" declined conventionally after the Meiji Restoration, only the Hirata group declined, and the historical investigation group continues Meiji or subsequent ones, and be come a department of the University of Tokyo classic short course.Chinese Guoxue has obtained the direct i dea to the nationalism of Japanese Miyake Setsurei and ShigaShigetaka and others.Japanese Nationalism was what reappraised Kokugaku , although it was critical, Kokugaku has not been recognized in China. Moreover, the group understood that Guoxue is the conventional study of old documents (Hanxue) itself also existed.

In Korea Kwok haewk has in Confucianism a group made into Kwok haewk under the influence of Chinese Guoxue , and the group which makes the culture unique to Korea under the influence of Kokugaku appeared.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：中国哲学

キーワード：中国哲学・思想　日本哲学　東洋・日本思想史　国学

１．研究開始当初の背景

中国、日本、朝鮮はともに近代以降、伝統的な学術を「国学」という用語を用いて表現しているが、実際の「国学」の形態は大きく異なったものである。中国の「国学」は日本の「国学」から直接又は間接的にその影響を受けて生まれたことは明らかであり、朝鮮の「国学」もまた日本・中国の「国学」から影響を受けている。しかし、なぜ相互の影響とはどのようなものかという実態に基づく研究、相互の影響がありながらこのように全く異なった形態をとるかという原因については依然として解明されていない。

また中国の「国学」は、西洋の衝撃によって伝統的世界観が揺らぎ、洋務論＝中体西用論、変法＝中体の西洋化、革命＝国粋主義と変化したと理解されてきたが、そのパラダイムでは「国学」の成立過程は説明できない。近代以前の東アジアの伝統的知的世界には「儒学」的な共通の知的基盤があり、東アジア共通の知的基盤を考慮して「国学」を捉え直すことによって、新たなパラダイムを構築して近代以前、近代以降の東アジアの知的世界を考察する必要がある。

２．研究の目的

１）近代の中国・日本・朝鮮の東アジア諸国における「国学」について、欧米の学術・文化の受容による伝統学術の変容・再構築という観点から、中国・日本・朝鮮の知的枠組みの中で伝統的な学術・文化が「国学」として再定義・再構築する過程を解明することを主な目的とする。

２）併せて中国・日本・朝鮮の「国学」の形成過程の共通点・相違点を考察することによって、近代東アジアの知的世界及び三国の文化的な特徴を明らかにするために必要な新たな枠組みを獲得することも目的とする。

３）また、これらの枠組みのもと、西洋の学術・文化の東アジア三国への影響を再検討することによって、東アジア三国の知的基盤の共通性及びその相違点について明らかにする。

３．研究の方法

日本・中国・朝鮮の「国学」の成立過程について研究する、中国の「国学」については研究代表者末岡宏が、日本の「国学」については田畑真美が、朝鮮の「国学」については鈴木信昭が国学に主に資料の収集・分析を担当する。研究に進めるに当たって、当時の雑誌及びその復刻について、電子データ・マイクロフィルムを含めた資料を収集するとともに、研究代表者及び分担者が電子データを作成し、このデータを総合的に分析することによて研究を進める。

末岡は不足していること資料、特に『四川國學雑誌』等のマイクロフィルム資料を中心に収集するとともに、「古史弁学派」「国故整理運動」を中心に分析を進めるとともに、中国国学の成立に影響を与えた日本の学術・思想関係の調査を行う。

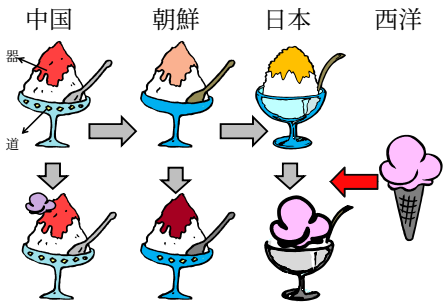
田畑は、中国人亡命者・留学生との交流が顕著な三宅雪嶺らの『国民新聞』を中心に日本国学関係の資料を収集・分析するとともに、東京大学国文学研究室本居文庫「明治期国学研究雑誌集成」及び國學院大學日本文化研究所に所蔵される資料を調査する。併せて国立国会図書館近代デジタルライブラリーの資料を末岡の協力のもとに分析する。

鈴木は、朝鮮国学に関する先行研究を調査するとともに、韓国を訪問して韓国国立中央図書館・成均館大学校・ソウル大学において関連する資料を調査するとともに国学研究に関する情報を収集し、併せて九州大学韓国研究センター等国内の研究機関を訪問して資料・情報を収集する。

４．研究成果

西洋文化の東アジア世界への影響である西学中源説・中体西用論は、西洋の衝撃によって伝統的世界観が揺らぎによるのではなく、中国を中核とする東アジアの伝統的世界観が揺らぎ無く信じられていてこそ生まれたものである。従って、従来の洋務論-変法論-革命論のモデルで、洋務論・変法論で揺らいだ伝統学術が革命論=ナショナリズムによって「伝統の再生」として「国学」が生まれたという伝統否定=近代化説は成立せず、伝統的学術体系・世界観が直接「国学」に変化するのであり、その傾向は中国において著しい。日本における中国の近代化研究は、中体西用論を日本の和魂洋才とのアナロジーでとらえて、和魂洋才の「和魂」を中体西用論における「中体」とすることで、日本の西洋学術受容のパラダイムを援用した中国の国学成立の説明するが、そこには進んだ日本=遅れた中国という植民地主義的な偏向を含んでいる可能性がある。

中体西用·和魂洋才



日本の「国学」について、江戸時代において本居宣長が「国学」を生み出した思想的背景には、欲望の肯定があって、それは当時の朱子学を中心とする「儒教」が欲望を否定す

ることと対をなしており、宣長後の「国学」の展開においても「儒教」への対抗意識が大きく働いており、当時の「儒教」を考慮する必要がある。

國學院大學 21 世紀 COE プログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の代表的な成果である藤田大誠『近代国学の研究』（弘文堂 2007）によれば、従来明治維新以降の日本の「国学」は衰退したと考えられていたが、衰退したのは平田派国学のみであり、小中村清矩を中心とした「考証学派」等は明治以降も存続し、東京大学古典講習科の創設、古典講習科廃止後の皇典講究所とつながって、近代日本においても「国学」は存続し続けていた。

中国で「国学」を最初に主張した『国粋学報』の編集者黄節は、日本の「国学」ではなく、三宅雪嶺・志賀重昂らの「国粋主義」に直接の着想を得ている。三宅雪嶺・志賀重昂らの「国粋主義」は日本が西洋の学術文化を受容していく過程で、日本の伝統文化を世界的な知の枠組みの中で再評価したものであって、旧来の平田派などの「国学」に対しては批判的であった。黄節においては中国「国学」は「国粋主義」と同じものと認識され、西洋文化に対抗する中国の伝統的な知の伝統であるとされており、日本の国学についてはほとんど無視している。また『国粋学報』の初期からの主筆である劉師培にとって「国学」とは劉師培の祖父から引き継がれてきた家学でもある、清代の考証学（「漢学」）そのものであると理解されており、黄節のような西洋の文化に対する対抗意識は少なくとも資料上には見られない。つまり『国粋学報』では「国学」について二つの異なった定義がなされており、その主張は西洋の文化に対する認識という点で大きく異なるにもかかわらず、その相違点は『国粋学報』誌上、あるいはその執筆者たちの間では意識されていないように見える。

日本の「国粋主義」と同時期に創設された中国学（支那学）の代表的研究者狩野直喜は中国の「国学」を日本の「国学」との比較で論じており、日本の「国学」に対しては否定的に評価するが、中国の「国学」については否定はせず、中国の考証学について好意的であり、国粋学報の中の漢学を主張する学者たちの成果を利用することがある。つまり明治においても日本の「国学」と中国の「国学」の相違について考察している日本人がいたことがわかる。

朝鮮の「国学」は、中国の「国学」の影響で儒学を「国学」とするグループがあり、その後日本の国学の影響で朝鮮独自の文化を「国学」とするグループが登場している。韓国慶北大学校国文学科において以前から朝鮮の「国学」について研究がなされているが、その対象となる「国学」は朝鮮における中国の伝統学術の受容・展開の成果にあり、日本の「国学」とは直接関係していない。また現在韓国における「国学」については、近代における西洋の衝撃によって新たに始まったとする朝鮮の伝統的知の再評価であるという説、大韓帝国期に日本の「国学」の影響を受けて「朝鮮学」という形で成立したという説、中国の「国学」に影響を受けたものとする説があるが、伝統的学術そのものを「国学」として、中国・朝鮮の「国学」との関係は意識されていない。しかし、明治中期において、中国から日本への亡命者・留学生は革命派・変法派を問わず東京で知的空間を形成しており、彼らは日本人と交流をもつとともに、朝鮮・ベトナム等の政治改革を目指す若者たちとの交流があって、相互に影響をもちあったはずであり、今後研究する必要がある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）
<u>田畑真美</u>　「本居宣長における「欲」の位置づけ」、査読無、『富山大学人文学部紀要』第 54 号、pp.1-25、2011 年
<u>田畑真美</u>　「「背く自由」について」、『富山大学人文学部紀要』、査読無、第 57 号、pp.1-23、2012 年
<u>田畑真美</u>「「本つ学び」考」、『富山大学人文学部紀要』、査読無、第 58 号,pp.1-22、 2013 年
<u>末岡宏</u>　「劉師培の「國學發微」について－中国における「國學」成立の一側面－」、『中国思想史研究』、査読無、第 34 号、pp.358-379、2013 年

〔学会発表〕（計　０　件）

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
無し

６．研究組織
(1)研究代表者
末岡　宏（SUEOKA, Hiroshi）
富山大学・人文学部・教授
研究者番号：10252404

(2)研究分担者
鈴木　信昭（SUZUKI, Nobuaki）
富山大学・人文学部・教授
研究者番号：50206512

田畑　真美（TABATA, Mami）
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：80303197

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：